

氏名	勝野 美江		
学位の種類	博士（生涯発達科学）		
学位記番号	博甲第	7808	号
学位授与年月	平成	28年	3月 25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	「米作りの体験活動」により得られる学びと学びを育む要因について		
主査	筑波大学教授	博士（心理学）	藤生 英行
副査	筑波大学教授	博士（人文科学）	安藤 智子
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	大川 一郎
副査	東京福祉大学教授	教育学博士	田上 不二夫

論文の内容の要旨

（目的）

本研究の目的は「米作りの体験活動」の効果および関係要因を明らかにすることであった。

具体的には(1)「米作りの体験活動」により児童が農業への理解、食べ物への感謝の気持ち、ライフスキルや学習に関してどのような効果があるのかを検証し、(2)どのような児童がより学びを得ているか（児童の個人要因）、(3)学級担任、農業者の考えや指導法が子どもたちの学びにどのような影響を与えるか（米作り環境の要因）を明らかにすることを目的としている。また、得られる学びに影響を与える要因も明らかにすることを目的としている。

（対象と方法）

A 県 B 市の公立小学校 1 校の 5 年生 2 クラス 56 名（調査時期 2011 年 12 月）（研究 1, 研究 2）、A 県 B 市 16 校の 5 年生 883 名及び学級担任の教師 31 名（調査時期 2012 年 4～5 月、9～10 月）（研究 1, 研究 2, 研究 4, 研究 5）、X 県 Y の小学校 2 校計 6 クラスの 5 年生児童 200 名（調査時期 2013 年 5 月頃、10～11 月頃）（研究 3）、X 県 Y 市の 5 校の 5 年生 442 名（調査時期 2014 年 5～6 月、9～10 月、2015 年 2～3 月）（研究 6～研究 12）、X 県 Y 市小学校 2 校 5 年生の学級担任 6 名、①X 県 Y 市の公立小学校 5 年生 2 校の「米作りの体験活動」を支援する農業者 2 名、②A 県 B 市内の公立小学校 1 校の「米作りの体験活動」を支援する農業者 2 名、③C 県 D 市の小中学生等の「米作りの体験活動」を支援する農業者 1 名（調査時期 ①2013 年 5 月及び 10 月、②2013 年 7 月、③2013 年 8 月）（研究 8, 研究 10）、X 県 Y 市小学校 5 校の学級担任 14 名（2014 年 5～6 月、2015 年 2～3 月）（研究 8, 研究 9,

研究 12), X 県 Y 市の 5 校の支援を行っている農業者 18 名 (調査時期 2014 年 5~6 月, 9~10 月) (研究 10~研究 12) を複数のインフォーマントを対象に自由記述式アンケート又は質問紙調査が実施された。

(結果)

「米作りの体験活動」は、児童が対象となる人やものごとに直接的な関わりを結ぶ経験につながるものであり、体験によって五感を使うことで様々な刺激を受け、さまざまな気づきを得、それが思考や行動の変化にもつながり得るものであること、「米作りの体験活動」を通じて児童が農業への理解を深めていることや、食べ物への感謝の気持ちを育てていることが示された。

児童の個人要因については、過去に農業の体験活動の体験があつて、それ自体に肯定的なイメージを持っている場合は、米作りの体験活動が楽しいと感じ、非肯定的なイメージを持っている場合は米作りの体験活動から新たな学びを得る可能性が低いこと、過去に農業の体験活動を実施したことがあることは、米作りの体験活動を行う前からある程度米作りの大変さなどを理解し、小学校 5 年生で新たに米作りの体験活動を行うことにより、ライフスキルを高く持つことと有意な関係があつた。また、農作業に対する肯定的なイメージを持つことが、米作りの体験活動の前から直接的な効果、波及的な効果を持つことと関係があり、農業とのつながり感と有意な正の関係があることという結果となつた。さらに、農業とのつながり感は、過去の農業の体験活動や他者からの受容感と関係があり、米作りの体験活動への内発的動機づけとも関係があり、米作りの体験活動の直接的な効果や学習面の効果に特に関係があるという結果となつた。一方、農業とのつながり感を持っていることが新たに米作りの体験活動を行ったことで、直接的な効果、波及的な効果の一部を低める方に影響を与えている可能性があることが示された。他者からの受容感は、農業の体験活動の直接的な効果、波及的な効果の一部と関係があるという結果も示された。

米作り環境の要因については、学級担任である教師の教えと子どもたちの学びとの関係について、最も可能性が高いものとして、児童の米作りの体験活動に対し学級担任が期待を高く持つことが児童の理科の得点に有意な負の影響を与えていた。Time1 の得点に有意な正の効果があつたものとして、学級担任が児童の食べ物への関心・感謝の気持ちを醸成させようとすることと問題解決力、児童が自ら学ぶことに学級担任が期待を高く持つことと算数、給食があつた。得点の向上に有意な正の効果があつたものとして、学級担任が児童の食べ物への関心・感謝の気持ちを醸成させようとすることと児童のマナーと総合学習、教師が子どもたち自身の変化を期待することと算数、理科、給食があつた。一方、Time1 の得点に有意な負の効果があつたものとして、教師が子どもたち自身の変化を期待することと給食があつた。さらに、教師が児童の食べ物への関心や感謝の気持ちを醸成しようとするのが、Time3 の直接的な効果のうちの米作りの大変さへの理解、ライフスキルのうちの友だちとの関係、自主学習、マナーの値に弱い正の関係があつた。これらのうち、特にマナーとの関係が比較的高い数値となつていた。体験内容と児童の学びとの関係については、稲刈りの体験が児童にとって特に大きな学びを得る体験活動であること、他の作業工程を軽視することなく、時間の許す限り作業プロセスを丁寧に体験すること、また、十分な面積の田んぼを体験の場として確保することも重要であることが質的研究により示された。「実施した活動数」が多い児童の「米作りの大変さへの理解」が米作りの体験の前後で有意に向上し、「実施した活動数」が少ない児童より多い児童の方が「米作りの大変さへの理解」が高いという結果も得られた。また、児童が体験した米作りの体験活動の内容の数が多くマナー、総合的な学習の時

間、給食の有意な得点の向上とにわずかに関係があった。わずかな影響であったものの、田んぼの面積の広さは友だちとの関係、将来計画、国語、給食の得点の低下に有意な関係があり、総合的な学習の時間の得点の向上に有意な関係があった。学校から田んぼまでの距離についても食べ物への感謝の気持ちの得点の低下に有意な関係が、理科の得点の向上に有意な関係があった。

農業者の教えと児童の学びとの関係については、農業者が米作りの体験活動で実践したことが多いことは、児童の食べ物への感謝の気持ち、国語の得点の低下、情報処理の得点の向上、農業者が指導の際に心がけたことが多いことは、児童の食べ物への感謝の気持ち、将来計画、国語、社会の得点の向上、総合的な学習の時間の得点の低下に有意な影響を与えていた。一方、共分散構造分析では、農業者の教えの変数はいずれも児童の変数に対し有意な負のパスを示していた。

(考察)

「米作りの体験活動」により児童がどのような学びを得られるのかという点については、「米作りの体験活動」を通じて児童が直接的な効果、波及的な効果を得ていることが示唆された。児童の個人要因については、過去に農業の体験活動があって農作業に対し肯定的イメージを持つことと他者からの受容感が農業とのつながり感の高さに影響を与え、農業とのつながり感が直接的な効果と学習面の効果に影響を与えている可能性が示唆された。ただし、米作りの体験活動を通じては、農業とのつながり感が直接的な効果、波及的な効果の変数の一部の得点の低下に影響を与えている可能性も示唆され、今後さらなる研究を行う必要があった。米作り環境の要因については、いずれもわずかな影響の可能性しか見いだせなかったが、学級担任が児童の食べ物への関心・感謝の気持ちを醸成させようとするのが児童のマナーと総合学習、教師が子どもたち自身の変化を期待することが算数、理科、給食の得点の向上にわずかに影響を与えることが示唆された。また、できるだけ多くの作業プロセスの体験を行うことが児童の学びにとって重要であること、田んぼの面積が広いことが重要であるという結果とライフスキルや学習面の効果に負の影響を与える可能性もわずかではあるが示唆され、今後さらなる研究が必要であると考えられた。農業者の教えと児童への効果の関係では、正の影響と負の影響の双方の可能性がわずかではあるが示唆された。米作り環境の要因については、教師、農業者の対象が少なく本研究だけで結論付けることはできないと考えられ、さらなる研究を行う必要があると考えられる。

審査の結果の要旨

(批評)

本研究は、これまでほとんど実証的な研究が行われてこなかった「米作りの体験活動」の効果について、質的研究法および量的研究法を用いて実証的にアプローチする研究であった。さまざまな交絡変数があるため検出が困難であると考えられていたが、本研究において一定の知見が得られた。米作り（農業）の体験活動は、小学校「生活科」や「社会」の文部科学省による学習指導要領でも取り上げられているが、その効果についてデータを用いて論述できた貴重な研究と言って良い。この領域の研究では、バイブルとして引用される研究として位置づけられよう。本研究を契機として、今後体験活動の子どもたちへの好ましい影響を明らかにする研究が増えることが期待される。

平成28年2月2日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（生涯発達科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。